
帝王の血

一言 真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帝王の血

【Zコード】

Z4594K

【作者名】

一言 真

【あらすじ】

葉太はある日を境に血に染まつたまがまがしい夢を見るようになります。同時に彼はある不可解な事件に巻き込まれていく。迫りくる非日常、うずく血。さまざまな奇妙な現象に遭つ中、葉太は運命に立ち向かう。伝奇小説。

「帝王よ。人の血肉を献上しにまいりました」
ふと声がした。かすれ、しわがれた、声が。

視線を上げると、黒い影が揺れ動いて立っていた。全身、黒い毛に覆われ、月明かりに鈍くつややかに光るその毛は草のようになややと揺れ動き、なびいている。

顔が見えた。人のそれではなかつた。鈍く照り輝く黒い鼻。突き出た口、それを縁取る長い牙。頭にかぶさつた茶色いたてがみ。彼（、）は、長い爪のはえた手の平に血の滴る肉塊を載せて、差し出してきた。

「帝王よ、どうぞお召し上がりください」

見れば、彼の背後に、点々と血だまりができ、一直線に続いていた。その血だまりの先に、壁に寄りかかるようにして、人の影がある。

ちぎれた頭が地面に転がり、首の断面が晒され、その躯からだは壁を背にして傾いていて、こちらに足先を向けている。

躯の胸のあたりに、大きく切り裂かれた跡がある。その深い傷は、中の臓腑をも突き破り、破れた皮膚からぶちまけられている。

彼が、やつたのだ。彼が、その爪で、人の体を引き裂いたのだ。

「帝王よ。さあ、おあがりください」

彼の伸びた口から、ぐぐもつた声が上がる。

差し出された肉塊を掴む。それを顔に近づける。生臭い血の匂いが鼻をつく。

口の中に唾液が込み上げて来て、口の端から漏れ落ち、顎を伝い、肉塊の上に落ちる。

透明の唾液が血と混じり合い、ピンク色の液体となつて地面に滴り落ちて行く。

肉塊を顔に近づけ、それに歯をたてる。

しゃりしゃり。

口の中で、骨が碎け散り、肉が割かれ、血が舌の上に広がる。もつ一口食べる。生臭さが口の中に広がり、唾液をそそって心地よい。

もう一口。もう一口。

すべてを飲み干し、彼に視線を向ける。彼は牙のある口を斜めに歪めて笑つた。

「帝王よ。こちらもどうぞ」

彼はもう片手にあつた肉塊を差し出してくる。

それに飛びつくよつに両手で抱えると、それにかぶりつき貪るようになつて笑べだした。

血の濃い甘い味。どこか濁んでいて、血肉が混ざつたまろやかな液体。

胸の底から歓喜が沸いてくる。血肉を貪りながら、咆哮する。

くれ。もつと。

血肉を。人の血肉を。

「！」

俺はがばつと布団をはいで起き上がる。何だ、今の夢は。夢の中の光景が、生々しく頭に浮かびあがる。地面を染め上げる血。手の平に広がる生温かな血肉の感触。

俺は吐き気がして、口を手で押さえる。胃液が食道をせり上がり、喉まで差しかかる。俺はそれをなんとか押しどじめると、大きく息をついて深呼吸する。

とにかく、水を。

そう思つて上体を支える為にベッドに片手をつりこむとして、ふわりと手の平に柔らかい感触が広がつた。

俺はなんだこの感触は、と横を見やる。そこに横たわつてゐる姉ちゃんの姿に、俺は肩を跳ね上げる。

「うーん……」

姉ちゃんが呻きながら、布団を体にまきつけてみのむしのようにならまつている。俺の手の平は姉ちゃんの片胸の上に置かれていて、その柔らかい感触が、手の平に広がり、腕を伝つて、頭の中に刺激として広まり、頭を沸騰させる。

「うわあっ」

俺は慌てて手を離す。豆腐のように柔らかでふつくらとした、弾力のある感触。手の平ではつかみきれず、端をはみだし、胸の鼓動と共にかすかに震えているその胸。

「なんで、姉ちゃん、こんなところで寝てるんだよー。」

「その声に、姉ちゃんが薄眼を開ける。

「だつて、葉ちゃんの布団、あつたかいんだもん」

「とつとと布団から出ひよー。」

「いこじやないの」

姉ちゃんはすりすりとこひひひひひとい、近寄つてくる。

「わ、それ以上近寄るなあー。」

いきり立つた股間を押さえながら俺は叫ぶ。

「いこじやないの」

姉ちゃんは俺との距離をつめ、すっと腕をつかんでくる。股間が脈打ち、さらにいきり立ち、血脈盛んに運動を続ける。

「近寄るなつてばー！」

俺は姉ちゃんの腕を振り切り、ベッドから降りる。そして掛け布団を掴んで、姉ちゃんから引きはがす。

ぼわっと掛け布団が舞い、姉ちゃんの全身があらわになる。

制服姿の姉ちゃんは身を縮ませてベッドに横たわつていた。

ストレートの長い髪。窓から差し込む眩しい日の光に照らされてつややかに光り、黄色くきらめいている。

ぱりとした白いワイヤンは、姉ちゃんのふくよかな胸を包んでふつくらと盛り上がり、スカートからは、艶めかしい足がすらりと伸びてこむ。

俺は睡をじくじくと飲み干した。

すりりとした細い肢体。ゆっくと寝息を立て、弾む胸。抱きしめると折れてしまいそうな華奢な肩。

俺は田を逸らし、「わざと朝飯にするぞー」と叫ぶ。

「いやあよ。葉ちゃんの温もりが残つたこの布団、気持ちいいんだもん」

やう言つたと同時に、姉ちゃんの腹がぐきゅうと鳴つた。姉ちゃんがむくつと首を持ち上げる。

「お腹空いた……」

「せひ、言わんといちやなこ。いくぞ」

「起こして、起こしてー」

「ひりて手を差しのべて、甘えた声を上げる姉ちゃん。

「仕方ねえなあ……」

俺は姉ちゃんの腕をつかみ、引っ張つて起き上がる。姉ちゃんは足を床につかると、満足そうに田を細め、ベッドから立ち上がる。

「わざと行へべ」

俺がぶつきあひまづつと、姉ちゃんは俺の手をつかんできて、

「うん！」と元気に笑つたのだった。

姉ちゃんは俺とは血のつながらない姉弟だ。親が俺たちが小さい時に再婚して、父さんと母さんにそれぞれ連れ子がいて、俺たちは出会つた。

けれど、俺たちが小学生の時に、両親が交通事故に遭つて、死んでしまし、この家には俺と姉ちゃんの一人だけが取り残された。それからとこつもの姉ちゃんが俺の世話を焼くようになつた。

姉ちゃんは面倒見はいいんだけど、妙に俺にでれでれとすり寄つてきて、ことん甘えてくる癖がある。俺がもう中学生になるんだからやめてくれよ、と言つても聞かず、それで俺がキレて姉ちゃんを無視すると、「葉ちゃんが反抗期に突入しちやつた」とうなだれる始末。

俺と姉ちゃんはリビングで向かい合わせにテーブルにつき、朝食

を取つた。

テレビをつけようとすると、「葉ちゃん、」飯中はテレビ見ちゃダメ」とたしなめられる。

「いいだろ、少しくらい」「

俺はまた姉ちゃんへの反抗精神に火が付き、テレビをつけた。ニュースを見ると、昨日バラバラ死体が発見されたとのニュースが流れた。路上で、バラバラ死体が転がっているのを通りがかりの主婦が見つけたらしい。首が切断され、胸に大きな切り傷があるとのこと。

「最近は物騒だねえ」

姉ちゃんがたくあんをこりこり頬張りながら言つ。

「姉ちゃんも、気をつけるよ。襲われないよ!」「

「大丈夫よ、私は。得意の柔道で悪漢をやつつけてやるんだから」「やつつけなくていいから、襲われたらすぐに逃げるんだぞ。姉ちゃんといいんだから、鬪つたりしたら絶対負けるつて

「ぶーつ、何よそれ。葉ちゃんの意地悪」

そんなことを話しながら、朝食を片づけた。

姉ちゃんと一緒に家を出る。扉を開けた途端に広がるのは、頭上を覆い尽くす背の高い木。膨大な敷地の中に埋め尽くされる砂利の地面。そして、古びた木の柱が目につく社。

ここは神社の境内だった。俺の家は神社の境内にあり、相当ボロな家に暮らしている。

扉を施錠すると、姉ちゃんが俺の腕を引いて、社に近づく。

姉ちゃんは制服のブレザーのポケットから熊のストラップがついた財布を取り出ると、中から五円を一枚取り出し、一つを俺に差し出してくれる。

姉ちゃんが投げ込む。ちりん、と硬貨が箱にぶつかる音が鳴る。

俺も投げ込む。ちりん。

姉ちゃんは鈴を高く鳴らした後、妙にかしこまつた様子で手の平を大きく叩き、目をつむつて念じる。

「今日も、葉ちゃんとうふと甘い生活が送れますわ」

「毎度ながら、何の願い事してるんだよ、姉ちゃん」

俺が白い田で言つと、姉ちゃんは薄田を開けて、シックと唇に人差し指を突き立て、「お参りの最中は静かに！ 毎回言つてるでしょ

うー」とたしなめる。

俺はへいへいと言つて、社に向き直り、鈴を鳴らし、手の平を叩いて合わせる。

今日も平和な一日が送れますよ。それと。

姉ちゃんと、いつまでも元気に仲良く過ごせますよ。

俺はそう念じると、田を開いた。すると、間近に姉ちゃんの顔があり、にこにこ笑いながらじつと俺を見つめているので、俺はぎょつとしながら「何だよ」とじどうもどろになつて言つ。それでも姉ちゃんの端正な顔から田が離せずに、じつと姉ちゃんの田を見つめ返す。

「葉ちゃん、何の願い事してたの？」

「平和な一日が送れますよ。……」

「ほんとに、それだけ？」

姉ちゃんの追求に、俺はかあつと顔が熱くなつて、間近にある姉ちゃんの顔から視線を逸らし、

「それだけだよ。悪いけど、姉ちゃんのことなんて、これっぽっちもお願いしてないから」

そう言つてしまつた。

お姉ちゃんはどうか悪戯っぽく笑つて、ふーんとその肉感的な唇を吊上げて、

「葉ちゃんが、私のこと、気遣つてくれてるかと思つたのに。残念だなあ」

とわざといじつて言つて、背中で手を組んで歩き始める。

「なんだよ、その込み笑い。気持ち悪」

俺は姉ちゃんの背中に向けて言い放つ。姉ちゃんの肩がびくつと跳ね上がり、ふくりと頬を膨らませた姉ちゃんが振り返る。

「何よ、気持ち悪い。ひびーー、葉ちゃん。姉さんの」と悪く言うなんて、いけないんだあ

「姉ちゃんが俺をからかうからこうなるんだろ」「

俺は姉ちゃんの横をすたすたと横切り、自分だけどんどん歩いていく。

「待つてよ、意地悪葉ちゃん」

「自業自得だ。俺はわざと行くから姉ちゃんは五分後にここに来を出

発しな

「いやあよ。そんなことしたら、葉ちゃんと腕を組んで登校できな

いじゃない

「しなくていいから！ そんなことしたら、田立つかりー。ただでさえ俺たち顔似てないんだから、姉弟に見えないだろ」

「じゃあ、カップルに見えるって？」

無垢な笑顔で言われたその言葉に、俺はぎくりとしてしまう。俺と姉ちゃんがカップルとして腕を組んで歩いている様子を想像してしまったからだ。

「葉ちゃん？」

急に押し黙ってしまった俺に、姉ちゃんが眉をしかめながらじりじろ顔をのぞきこんでくる。

「あんまり顔近付けんなよ、姉ちゃん」

「だつて、葉ちゃん、変な顔してんだもん」

そう言いながら、急に手を伸ばしてきて、俺の腕を取り、ぎゅつと腕を組む姉ちゃん。

「おわつ、何すんだよー！」

俺は慌てて姉ちゃんの手をつかみ、腕から引きはがそうとする。

「いいじゃない。」そのまま歩きましょつよ。私良いよ、葉ちゃんとかップルに見られても」

突然の言葉に、胸がどくんと一際大きく鳴る。こきなり何を言つ

んだよ、姉ちゃん。

俺は顔が耳まで真っ赤になるのを感じた。姉ちゃんは相変わらず

屈託のない笑顔で俺の顔をじろじろ見つめてくる。

純粋な愛情。いつもなら、はぐらかして終わりなのに、今は妙に意識してしまつてゐるせいか、姉ちゃんの愛情表現にどぎもぞして変な気になつてくる。

「いこ」

姉ちゃんは腕を組んだまま、神社の境内から出て、階段を降り出す。朝のお参りに来たらしく中年のおばさんが、俺たちを見て、にっこりとほほえましそうに笑つて見つめてきて、頭を下げる。

姉ちゃんがそれに対し、にっこりとした笑みで礼をし返す。俺も、しぶしぶ頭を下げる。

いつもと変わらない日常。だけど、そんなほのぼのとした時間の中で、胸の鼓動だけが忙しく音を刻み、静かに淡く切ない感情を肥大化させ、胸に広げていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4594k/>

帝王の血

2011年10月5日02時25分発行